

『保育の見直し』

● 一〇〇〇日の実践記録 ●

著者 大戸美也子

横浜学園附属

元町幼稚園

発行所 フレーベル館

小さいが、しっかりとした厚みの一冊である。出版される前から、元町幼稚園の五年間の保育実践過程が活字となつて紹介されるということ、おそらく他にあまり類をみない価値のある一冊にならうと、心待ちにしてゐた。

本書は、行事中心の「定型化した保育」に疑問を抱きはじめた先生方が、「子ども主体の保育の実現」をめざして、五年の間、様々な勉強、模索、試練をのりこえていく過程を記録にまとめたものである。

本書の中で最も興味深い点は、まず何故このようなことができたのかということであろう。その答えは、著者が最後にまとめて、「園長の保育理解、主任の牽引力と共に、保育者の自己研鑽への情熱と保育者相互の連帯の強さの賜物」と書いておられる。これだけでは読者のサイドには、現実のこととして何かピンとこないが、本文をていねいに読んでいくと、その事が具体的にどういうことだったのか、自分なりに解釈してゆけると思う。

最も初期の段階で、先生方がこれまでの保育に疑問を抱きはじめていく過程は特に興味深い。問題が動きはじめる寸前までの様子は、「次第に行事の規模がふくらみ、保育者にも負担が感じられるようになってきました。しかし定型化した保育以外に思いをめぐらせることもなく、年中行事とわり切つて、保育者の保育技術を洗練させて、困難を切りぬけていったのです。」(点線は筆者)と紹介されている。この辺がいかにもまじめで律義な日本人の特性とにが笑いせずにはいられない。そして、こうした伝統的努力型保育者をいかに周囲に多くみるかにつ

いても、あらためて気づかされるのである。この一節を
読み筆者は「何とかやれてしまうことの怖さ」を再認識
した次第である。

その後、元町幼稚園には、「何とかやれない」新卒の
若い教師が入り、「……これでいいのかしら」という疑
問に発し、後は、玉突き玉が次々に当たってはね返るよ
うに、経験豊かな保育者、主任、園長そして、研究会へ
と求める道が広がってゆくのである。こうした過程は、
一読すると羨しい限りでもあるが、当の先生方は、まさ
に暗中、一光を求めてはいのぼる心境であったと察す
る。特に感激するのは、現職研（お茶の水女子大学幼児
教育現職研究）にご参加の先生方が、非常に熱心に暖か
く援助していらっしやることである。こうしたことも含
め、横浜という地理的、文化的状況も何らかの役割を果
していたのではないかと推察する。

子どもの様々な活動の記録や生活展、運動会の紹介
は、研究のつっこみの深さを教えてくれて貴重な資料
である。不思議なことは、改革前の教育目標と改革後の指

導目標が一見それ程変わっていないことだが、このこと
はつくづく目標は確かな現実に裏づけられてこそ有意義
なものとなることを教えてくれる。

最後に、元町幼稚園はさらに「子ども本位の保育を洗
練させていく」ことを課題としているということである
が、筆者には、一般論として、親や小学校のやりとりが
大変に考えさせられる点として残った。有数の（分って
くれる）小学校の先生や親だけを相手に幼児教育の本質
を語っていたのでは、少々消極的すぎるのではないかと
いう気がしてきた。我々も、もっと小学校から先へ育つ
子どもを遠くみつめ、先方からの学問的、実証的連続
研究を交え、社会に説得してゆく力を持たなければと痛
感させられた。

とにかく、考える保育者であったら、手元にひとつ欲
しい一冊である。手にとっていつ響くかは、それぞれ異
なるかも知れないが……。

（常磐学園短期大学 江波諄子）